

「コロナ世代と呼ばれる？」 病院実習相次ぎ中止、悩める看護学生たち

毎日新聞 2020年10月10日 15時00分（最終更新 10月10日 15時10分）

生野由佳



地元劇団の俳優が演じる患者とオンラインで対話する看護学生たち＝修文大提供

新型コロナウイルスの感染が収束しない中で、看護学生が苦境に立たされている。最も重要な教育プログラムである病院実習が、感染拡大防止のために4月以降、相次いで中止されたためだ。それでも次年度への計画変更ができない最終学年の学生は、来春から医療現場に立たざるを得ない。

「コロナ世代の看護師は……」。そんなレッテルを貼られはしないか。学生たちの間に不安が広がる中、経験不足を少しでも補

おうと試行錯誤する看護教育の現場取材した。【生野由佳/統合デジタル取材センター】

「ゆとり世代」のように「コロナ世代の看護師」と呼ばれる？

<ゆとり世代は……と言われたように、私たちはコロナ世代の看護師って言われるのかなあ……> <コロナ世代は使えないね、ってなるよね>

コロナ禍に入り、看護学生を名乗るツイッターのアカウントから不安を訴える書き込みが相次いでいる。「ゆとり世代」とは、学習指導要領の改定によって授業時間が削減された時期に教育を受けた1987～2003年度生まれの世代を指す。多くの場合、本人たちの本来の能力や個性と無関係に、「競争心が乏しい」などの否定的レッテルを貼る言葉として使われてきた。

文部科学省などはコロナ禍を理由に、病院や介護施設などで行う「臨地実習」の学内代替を認めており、国家試験の資格取得や就職に直接の支障はない。だが、病院実習が中止になったことで、多くの学生たちが未来の看護師としてのスキルに自信が持てなくなっていることを、相次ぐ投稿は物語っている。

来春卒業の看護学生 「命を預かる自信を持ってない」

広告

Ads by Teads

そんな投稿をしていた1人と連絡を取ってみると、来年3月に卒業予定の看護学生（21）だった。本来数カ月にわたって行う予定だった実習は、大幅に変更になったという。

「実習の半分は学内で代替し、残りの半分は病院で実習ができました。ですが感染予防のため、通常は複数の患者さんを受け持てるのに1人になったり、接する回数も大幅に制限されたりと、十分な経験値を得られたとは思えませんでした」

実習不足は、「就職後に病院側が求める技術に達していないのでは」という不安につながった。

「病院実習をどれだけ受けられたかは、地域差もありますが、学内でも差が出ました。だけど、就職後は同じ一人の看護師です。『コロナ禍で経験がないので上手にできません』という言い訳は、絶対にできません」。そう考えれば考えるほど、将来の選択に迷いが出てくるという。

「学生ですべきことが身につけていないという自覚があります。そんな私が、命を預かる仕事をして良いのでしょうか。今も答えが出ていません」

代替の学内実習に工夫、劇団員が模擬患者を熱演

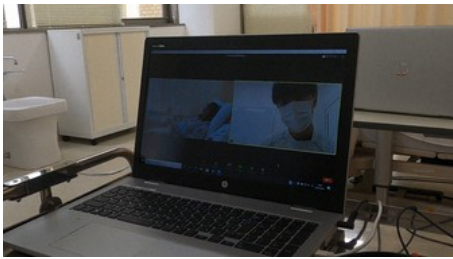


相撲佐希子准教授（本人提供）

病院実習ができないハンディを少しでも補おうと、教育現場も苦心している。修文大学（愛知県一宮市）看護学部の相撲（すまい）佐希子准教授の研究グループは8月、中止となった病院実習の代わりに地元劇団に模擬患者役を依頼し、学内実習を実施した。学生にリアリティーあふれる“患者”とのコミュニケーションを学んでもらうための試みだ。2年生100人が代替実習を受けた。

実習は、オンラインの画面越しに行った。ベッドに横たわる初老の女性。普通の患者に見えるが、実は劇団の役者だ。「62歳の患者、道明寺桜子さん。45歳の時に夫を亡くし、女手一つで育ててきた息子も巣立った。一人になったさみしさからお酒の量が増え、肝硬変を患ってしまった」——というプロフィールが学生に説明される。

体中をかきむしる女性は「かゆい、すごいかゆいです」と不快感を訴え、「私の父も同じ感じで死んじゃったのよ。父みたいになっちゃうんじゃないかと嫌だわ」。そんな不安を吐露する。



画面越しに、オンラインで患者役の女性と
会話する看護学生＝修文大提供

一人ずつ対応する学生たちは病状や家族構成を把握した上で、「苦しいですね」と相づちを打ったり、黙り込んでしまって言葉が続かなかったり。思うように接することができずに、泣き出してしまう学生の姿もあった。

相撲准教授によると、授業で教員や学生が模擬患者役を担うことはあるが、緊張感や臨場感はどうしても失われてしまうという。疾患を持つ患者のイメージを伝えられる人はいないだろうかと模索した結果、地元劇団「シンデレラ」の役者4人に依頼した。病名や生活背景も、すべて相撲准教授の看護経験から再現した架空の人たちだ。

相撲准教授は「看護師は、患者の仕草や表情から看護に必要なことを読み取って、信頼関係を結ぶコミュニケーション能力が求められます。世間話ではできても、看護に関わるプライベートな情報は話してくれない患者がたくさんいます」と話す。授業後、学生からは「患者と信頼関係を築きたいと思った」などと前向きな感想が寄せられたという。

相撲准教授は「コロナ禍を理由に教育の質を下げることはあってはなりません。新しい教育のスタイルを模索していく必要があります」と代替授業で工夫していく必要性を強調する。一方で、「病院実習は、授業で学んだ知識や技術を生かして実際の現場で実践する、最も大切な学習の場です。たとえ短期間でも直接、患者さんに接することが一番の学びになります。やはり現場に勝るものはありません」と複雑な表情を見せる。

7割以上の「臨地実習」が中止に

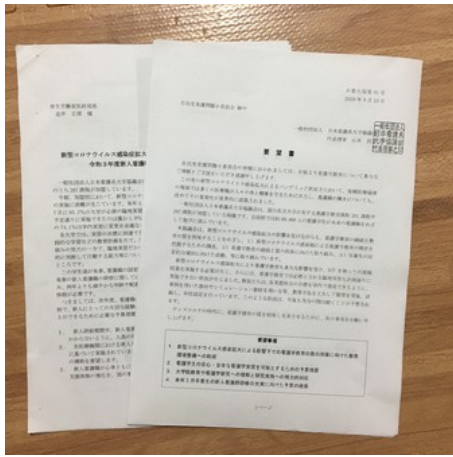
全国の国公立・私立大学の看護学部・学科などが所属する一般社団法人「日本看護系大学協議会」（JANPU、東京都千代田区）は、21年3月に卒業する4年生が今年4～7月に計画していた臨地実習について、実施状況をアンケート調査で尋ねた。回答した222校（4年生の在籍者数1万9401人）のうち、年度当初に実習を予定していたのは207校で、695科目が行われることになっていた。だが、計画通り実施されたのはわずか13科目（1・9%）で、過半数を大きく上回る515科目（74・1%）が学内実習に変更された。その他は「計画を変更して一部実施」などだった。

大学の場合、臨地実習は、4年間で23単位取得する必要がある。1単位およそ1週間で、実習は計約半年をかけて行う。

単位に対する科目数や実習名は大学ごとに異なるが、3年生後半～4年生の前半に高齢者施設や、急性期、慢性期など病状の異なる患者の病棟で学ぶ「領域別」という実習がその過半数を占める。今年4月には新型コロナの感染拡大で非常事態宣言が出されており、多くの看護学生がその影響をもろに受けた形だ。

国に新人研修の充実を求めて要望書を提出

こうした調査結果を受け、JANPUは8月に厚生労働省、9月に自民党の看護問題を検討する小委員会に、要望書を提出した。来年3月に卒業し4月に仕事を始める



新人看護師に対して、臨地実習を補うような「新人看護職員研修」の充実を求める内容だ。

この研修は「保健師助産師看護師法」などに基づき、病院などに努力義務が課されている。ベテラン看護師らが講師役となり、就職したばかりの看護職員の実践能力を向上させる制度だ。ただし、研修内容や日数に規定はなく、努力義務なので実施しない医療機関もある。

日本看護系大学協議会は来年3月に卒業する看護学生に対し「新人看護師研修」の充実を求めて厚生労働省などに要望書を提出している＝2020年10月9日午前11時43分、生野由佳撮影

研修にかかる費用は都道府県の「地域医療介護総合確保基金」などから助成されているが、要望書は研修充実のため、国の事業として経費を補助するよう厚労省などに

求めた。自民党の小委員会に対しては、新人研修を努力義務から必修に変えるよう法改正を要求した。

高齢化対応のためにも、経験の「差」埋める制度を

JANPU副代表理事で、三重県立看護大（津市）の菱沼典子学長は「実際の病院で現役看護師とやりとりをしたり、患者やその家族と対話したりすることは、学内実習のシミュレーションで補い切れない能力を育みます」と重要性を語る。その上で、「地域や大学ごとに実習環境が異なるうえに、同じ大学の中でも、履修状況次第で病院実習に行ける学生と、学内実習に変更になる学生が混在し、経験に差が生じてしまっている」と現状を問題視する。

そうした「差」を補うためには、新人研修の充実が不可欠、というのが菱沼さんたちの考えだ。「学生の経験不足を補うには、病院側には例年よりも細やかな配慮をした研修体制が望まれます。ただ、病院側の負担は大きくなります。新型コロナと共存せざるを得ない『ウィズコロナ』の時代に、看護師が離職せず、働き続けることができる支援を国には望んでいます」

コロナ禍の影響は今後も続くと予測される。25年には団塊の世代が全員75歳以上となり、医療従事者の人員と質の確保は喫緊の課題だ。

JANPU事務局によると、5日現在、厚労省などから正式な回答はないという。